農家を個別に訪問するようになる。やがて養鶏組合なども組織される。養鶏が比較的早くはじまるのは三神村であった。そのほか、緬羊（めんよう）・山羊（やぎ）などを飼育する農家もあったが、ほんの一時期であった。

第四節　商　業

明治八年（一八七五）の矢吹村戸籍（写）から生業としてあげられている職業をみると、総戸数一五四戸中、農一〇六戸、雑二四戸、商一二戸、工六戸、そのほか六戸とあり、農業が六八・八％と一番多く、商業は七・八％、工業と雑をあわせると一九・五％になる。同年の三城目村の場合をみると一二五戸中、農業は一一一戸で八八・八％である。中畑村については、資料がないので不明であるが、いずれにせよ自給自足でまかなうことができない物品や技術を供給することを生業とする人々がいた。明治になり居住・職業の自由が認められ「殖産興業」の流れの中で流通・交易が盛んになり、一層多様な生業が出現する。また交通機関の発達などにより多様化してくる。

雑・工と表記されている人々の多くは、職人・仕事師（力役）とよばれる人々であったと思われる。また農業を主業としつつ、商・工の仕事をする人々も多く、正確な実態はつかみにくい。

一　商　い

商業は「商い（あきな）」といった。商いを大別すると、店を構（かま）えて看板をあげる「商店」と各家に出向いて売り歩く「行商」がある。第三章交通・運輸・通信・交易の項でふれるのでここでは生業の実態として述べるにとどめる。

【表9】商業戸数調

業種	年度	矢吹町			中畑村			三神村		
		卸	仲買	小売	卸	仲買	小売	卸	仲買	小売
穀物	明治四十一			七			三			三
	明治四十三		一	七			二			六
野菜果物	明治四十一									
	明治四十三	一						一		三
酒	明治四十一			九			六			八
	明治四十三	三		七			七	三		九
味噌醤油	明治四十一			一二	一		六			五
	明治四十三			一二	一					三
煙草	明治四十一			四			五			四
	明治四十三			四			一			四
茶	明治四十一			三			三			一
	明治四十三			五						五
菓子	明治四十一	三		一九	一		八			九
	明治四十三	三		二一	一		一三			三
生糸	明治四十一		一			一			一	
	明治四十三		一			一			一	
織物	明治四十一			二			二			二
	明治四十三			三			三			二

（西白河郡統計書）

業種		古着		小間物		家具		履物		陶磁器		金属器		玻璃器		紙類		文具		木材	
年度		明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三	明治四十二	明治四十三
矢吹町	卸																			三	四
	仲買																				
	小売	二	二	三	三	三	四	三	三	一	一	六	六	一	一	一	一	一	一		
中畑村	卸																			三	四
	仲買																				
	小売	一	一	三	一			四		一	一	一				八		一	一		
三神村	卸																				
	仲買																				
	小売	一	一	三	四	一		二		一		三	三							二	二

業種	年度	矢吹町			中畑村			三神村		
		卸	仲買	小売	卸	仲買	小売	卸	仲買	小売
薪炭	明治四十二	五			一		三	五		一
	明治四十三	七		一	七		一	七		
肥料	明治四十二			三			三			三
	明治四十三			三			一			三
砂糖	明治四十二									
	明治四十三						三			
油類	明治四十二									
	明治四十三						一			
水産物	明治四十二									
	明治四十三									一
石材	明治四十二									
	明治四十三									二

（一）行商

行商は、商店のある中心部から離れた地域に商品を運んで売り歩く商いで、町まで出かけないと購入することができない商品を手軽に買うことができたので喜ばれた。卸商や仲卸商から商品を仕入れたり、小売商の商品を中継ぎするかたちで、商品を背負い籠や自転車にのせて戸毎にまわって販売する。代金のかわりに穀物などと「物々交換」する場合もあった。

矢吹で行商を生業とした統計的実態は資料に乏しいが、商店が配達をかねて行商する姿は昭和四十年代までみられた。

第二次世界大戦後の物資が欠乏した時期には、米をはじめ主食料が統制され自由な売買が禁止されていたので、農家をまわっ

て米などを買い集め（これを「ヤミ米」といった）、都会に行商する「ヤミ屋」が増加した。ヤミ屋は都会で着物や珍品・貴重品を買い集め、米と交換し、農村に物資を供給した。ヤミ屋の行商は伝統ある行商とは異なるが、都会の生命を維持する役割を果たした側面をもつ。やがて生産が再開し物資の流通が潤沢になると、にわか行商のヤミ屋は廃業する。

自家用自動車が増加し、物資の運搬や、買い物も便利になり、商品の流通が盛んになると、行商は商行為として成り立たなくなりしだいに姿を消す。行商から開店した人も多い。

次に主な行商をあげておく。

衣類行商　下着や仕事着、古着の晴着などを売り歩く人で、店頭にはない雰囲気で隣近所の女性を集め、じっくり品定めができる買物なので人気があった。また希望の品を頼んでおくと持ってきてもらえるので大変助かったという。装身具や身の回り品など珍しいものを手にすることもできた。都会の流行を家まで運んでくれる商いでもあった。

日用品雑貨商　日用品や雑貨の行商で、町までわざわざ買いにいくまでもない小間物や生活用品を手にいれるには喜ばれた行商人で、この次にくるのを心待ちにする人も多かったという。また頼めばなんでも持ってきてくれる「動く百貨店」的な存在として重宝がられた。

魚行商　冷蔵庫や冷凍魚がなかった時代、内陸部では海の生の魚を手にいれるのは困難であった。魚を市場から仕入れることのできる権利を持っている小売店は限られていたので、魚行商の多くは、小売商や、仲買商の売子であった。生の魚は保存が限られているので、塩魚・干魚が中心で「ボデ籠」を天秤でかついで売り歩き、庭先で注文に応じて捌いて売った。乾物（干魚・昆布など）も持ち歩いた。通常塩魚・一夜干しが多く、生の魚は祭りや田植えのときに頼んでおくと持ってきて刺身や切身に捌いてくれる。酒と刺身はこの上ない贅沢なご馳走であった。魚行商は、魚を捌く技術を持たなければならないので修業が必要であった。

ボデ籠は自転車にかわり、やがて自動車に冷蔵庫を備えて売り歩くようになった。

薬の行商

昔から越中、富山の薬売りは行商人としては代表的な存在であるが、地元の生業ではない。自動車でかたちをかえながら現在も続いている。

（二）商　店

前述のとおり明治八年には矢吹村の商は、一二戸を数えるのみであったが、明治四十二年には一一二戸となり全戸数に対する割合は二一・七％となっている（矢吹小『郷土誌』）。近郷の顧客を拡大して矢吹町が中心地に変容しその発展はめざましいものがある。扱う商品は別表のとおりであるが、一店舗で数種の商品をとり扱うのが普通であるから必ずしも戸数は一致しないが、傾向はわかる。

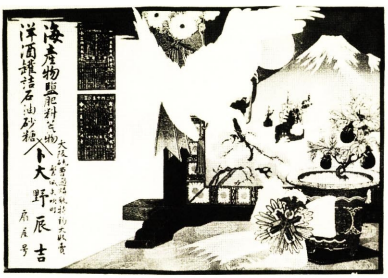
近年の矢吹町の「商業統計」は、昭和四十一年度（一九六六）から確認できる。昭和四十一年度には矢吹町内（三神・中畑を含む）には二六二の店舗があり、四十七年度には二六五、昭和五十一年度二七五、昭和五十七年三二〇、昭和六十三年度には二九三店舗となり減少する。つまり昭和五十年代は微増しているものの、六十年代にはいると減少する。平成十六年度の店舗数は一三八店舗となり昭和五十七年度の五分の二まで落ちこみ、とり扱い商品も変化する。つまり昭和の末期から今日までの二十年間に矢吹町内の店舗は激減したのである（表10参照）。この原因はさまざま考えられるが、一つには一般的にいわれるように大規模小売店舗すなわちスーパーマーケットの進出により消費者行動が大きく変化し、買い物はスーパーですませてしまうようになったことと無縁ではない。また自家用車の普及がこれを後押しするかたちになり、遠方であっても手軽に買い物にいくことができるようになった。そのため従来まで町民が利用してきた身近な商店は徐々に力を失い、廃業する店も増加したと思われる。

商店は卸売商、仲買商、小売商とあり、小売商がかねていることもある。

小売商

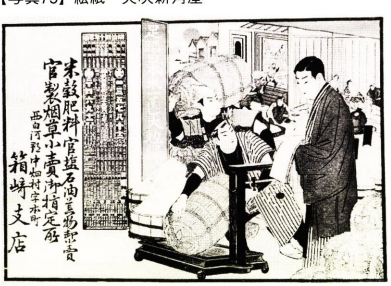
日常生活に必要なほとんどすべての商品を扱っているが、それぞれの地域での特徴をみることができる（表9参照）。野菜・果物の小売店は矢吹・中畑にはない、農業地域であるから理解できるが、三神には小売店がある。

【写真73】絵紙　矢吹亀屋



【写真74】絵紙　矢吹扇屋

【写真75】絵紙　矢吹新角屋



【写真76】絵紙　中畑箱崎支店

【表10】矢吹町商業統計調査

年度	卸売業	一般卸売業	繊維・機械器具・建築材料等卸売業	代理商・仲立	衣服・食料・家具等卸売業	各種商品小売業	織物・衣類・身のまわり品小売業	飲食料品小売業	自転車荷車小売業	自動車・自転車小売業	家具・建材・什器小売業	その他の小売業	年度総計
昭和四十一年度	一七						三四	一二一	一七		二七	四六	二六二
昭和四十七年度		一五				一	三八	一一四		一六	二四	五七	二六五
昭和五十一年度		一七				一	三四	一一七		一五	三〇	六一	二七五
昭和五十七年度		二九				一	三二	一二四		一七	三五	八一	三一〇
昭和六十三年度			一六	一	八	一	二七	一一三		一九	三〇	七八	二九三
平成十六年度			三	二	四	二六	一八	四二		七	二	三四	一三八

福島県統計調査課

農産物の中でキュウリ・ダイコンなど漬物野菜の生産が郡内でも上位であるところからその小売店があったとみられる。中畑村の味噌・醤油、茶、家具、履物店は四十三年にはなくなっている。扱い店の事情であろうか。玻瑠器（ガラス器）はまだ出はじめで矢吹にしか店はなかった。砂糖や油類は中畑村でしか売ってないのには、不思議な気もする。水産物は、行商の分野と思われるが、三神に一店ある。また三神の石材店も産地であるから理解できる。

昭和九年の三神村の店舗数は九戸に対し中畑村は二六戸と多い。矢吹町の店舗数は同時期の数は不明であるが昭和十一年には三六店が名をつらねている（第四章ムラ・マチ・イエ　表2参照）。

明治四十二年前後の状況として矢吹小『郷土誌』は次のように述べている（原文のまま）。

第十三章　経済

【写真77】絵紙　中畑丁字屋

【写真79】絵紙　中畑後藤留十

【写真78】絵紙　中畑清水屋

【写真80】絵紙　三神佐久間良治

（前略）　商業ハ大抵小売店ニテ外ニ仲買商七、八軒ヲ数フ。小売店ハ約二百円以上千円ノ投資（一萬円以上ノモノ四、五軒アリ）ヲ以テ営業スレトモ概シテ商業敏活ナラズ。仲買商ハ繭雑穀薪炭等ノ買集積出ヲナシ五百円乃至数千円ノ資本ヲ運転ス。（略）

明治四十二年の専業商家は五九戸、兼業商家五三戸、四十三年は専業六四戸、兼業五一一戸と商家の約半数は兼業でその傾向は矢吹町の商業構成の重要な部分をしめている。

仲買商　仲買商は穀物・生糸など限られている。また商業戸数に計上されていないが、馬など家畜を仲買するバクロウも各村にいる。これらは農業と兼業する場合が多く、季節になると商活動をしている。また外部からの業者もそれぞれ各村を巡って買つけをしていた。

卸商　生産者が卸商をかねることが多く、農産物・味噌醤油・酒・菓子・などが該当する。木材・薪炭などは近郊から集積して都市部に積出していた。いずれも少数である。

二　そのほかの商い

旅籠　宿場として発達した矢吹には旅籠（はたご）といわれた旅館や茶店が多かった。しかし宿場町割にある屋号をもつ家がすべて旅籠であったわけではない。その名残りを示す資料は、幕末期に本陣をつとめた古川屋に残すのみで戊辰の戦火などで資料の大部分を失っている。

明治期の統計資料には、生業として旅館を示すものはなく、すべて農業に包含されているのでその実態を知ることは困難である。明治になり交通機関が発達するにつれて、止宿する者が減少し旅館を生業とするのが困難になったと思われる。馬市など人が集まるとき、請（こ）われれば宿泊させる形態に変化し雇人をおかず家族で経営するようになる。

幕末から残った旅館としては、古川屋、今出屋、筑前屋、紙屋が営業を続け、ご猟場の狩猟者や行商人の宿として旅館を営んだ。

また、宿場にみられる貸座敷は明治以後も残り『西白河郡統計書』によれば、白河と矢吹にその登録があり矢吹には二軒あり（表11）娼妓が四人から七人いた。宿場の名残りであろう。

【表11】統計にみる貸座敷　（西白河郡統計書）

業種	貸座敷		
年度	明治四十二	明治四十三	大正　三
矢吹町　戸数	2	2	2
矢吹町　娼妓	4	5	7

矢吹小『郷土誌』は「生業一般の盛衰変遷調査」の中で、「徳川末ヨリ明治初年ニ亘（わた）リテ、娼妓ト馬子トハ其数実ニ夥（おびただ）シク矢吹本田ノ戸数約百戸娼妓ヲ置クモノ三十戸ヲ数ヒシト云ヘバ如何ニ此種ノ営業ノ盛ンナリカ知ルベシ」と述べ、鉄道の開通により娼妓と馬子が衰微したことと記している。馬子は力役と荷馬車業に転じたとしている。

会社・工場

商いとは異なるが、矢吹町には別表に示す会社・工場が創業し、それぞれに勤務することを生業とする形態が生れた。現在では当然のことであるが、弟子入り・修業の職人ではなく従業員として働く端緒ではあるまいか。当時の統計で「力役」とあるのがこれにあたるのだろうか。力役について前述の矢吹小『郷土誌』は次のように述べている。

「（略）　力役ハ日々二十銭乃至一円ノ賃金ヲ得テ生活ヲ支持ス。専業トシテ七十戸ニ過ギザルモ農商業家ニシテ傍ラ之レニ従フモノ多ク以テ本業収入ノ不足ヲ補フヲ常トス（明治四十二年前後ノ状況）」

各企業の従業者数は不明が多い。

【表12】矢吹の会社・工場　（西白河郡統計書）

矢吹町	会社名	創業	業種
	矢吹運送合資会社	明治三十三年七月	運送業
	丸通運送合資会社	明治三十三年九月	運送業
	矢吹製糸合資会社	明治三十年一月	生糸製造販売業
	矢吹製材合名会社	明治三十七年七月	製材業
	旭製材	明治四十年八月	製材業
	大木商店運送部		運送業
	酒井合名会社	大正三年	物品販売業
	仲西合名会社	大正三年	物品販売、金銭貸付業
	大木合名会社	大正三年	物品販売、精米業
	仲西工場	大正三年	製材業・旭製材所をうけつぐ
	大木水力工場	大正三年	精麦、製粉、製麺業